

児童・生徒の向上心，目標志向性に及ぼす“あこがれ”の影響

青木多寿子・中島 恭兵¹⁾
(2011年2月10日受理)

The Relation among Admiration, Goal Orientation and the Ambitions in Children and Students.

Tazuko AOKI, Kyohei NAKASHIMA

The purpose of this study was to identify the relation among admiration, ambitions and goal orientation. We hypothesized that admiration could make goal orientations better through ambitions in school children and students. Participants were one hundred ninety nine children and student. They were from 5th to 7th grade children and students. They were asked fifty three questions in five domains; admiration, goal orientation, three kinds of ambitions and envy. The envy was thought as a similar emotion to admiration, because they were the emotion about others who have comparatively higher ability. Multi regression analyses and single regression analyses were performed to find the relation between them. We found the relation among admiration, motivation and ambition. On the other hand, in lower admiration groups, we found envy was related with just performance goals. We also found developmental differences of relations between ambitions and goal orientations. We discussed how to use encouragement with ambitions and how to understand developmental difference of ambitions with children and students.

Key words: admiration, ambition, competitive spirit, motivation, goal orientation, jealousy

キーワード：あこがれ，向上心，やる気，負けん気，目標志向性，妬み

近年大人になりたくないとする子ども，将来の夢を抱けない子どもの増加が言われている。これは子どもの学ぶ意欲の低下と関係しているのではなかろうか。荻谷（2001）は，格差社会の進行に伴う学ぶ意欲格差の広がり指摘している。所得格差や雇用の不安定化が，教育における格差拡大へと向かわせ，子どもの学ぶ意欲の喪失をもたらしているという。

これまで子どもの学ぶ意欲に関する研究として，教育心理学の領域では動機づけが研究されてきた。ドウェック（Dweck, 1986）が提唱した達成目標理論もその一つである。達成目標理論では，目標志向性にはマスタリー（mastery）目標とパフォーマンス（performance）目標の2つがあると仮定されている。さらにエイムス（Ames, 1992）は目標志向性について，マスタリー目標は内発的動機づけを高めるが，パ

フォーマンス目標は他者との比較を増幅し，動機づけに否定的に作用すると述べている。

他方で，これらの動機づけ研究には社会的な文脈での動機づけという観点から十分に考慮されていないとの指摘がある（中谷，2001）。学校が社会的相互作用を通じた学習の場であると考えれば，子ども同士の関係がもたらす社会的動機づけが学ぶ意欲に直接的，間接的に影響を及ぼしている可能性があるだろう。そこで本研究では，社会的動機づけの一つとして「あこがれ」をとりあげる。

あこがれから生じる学習動機を社会的文脈の中に位置づけるには，「社会的比較理論」に基づく Smith（2000）の考え方が参考になる。Smith（2000）は，自己と他者の両者に着目した情動として，「下方同化的情動」「下方対比的情動」「上方対比的情動」「上方同化的情動」

1) 安芸郡府中町立府中小学校

の4種類をあげている(山本;2009)。そして、山本(2009)は、この中の「上方同化的情動」について、Smith自身があげている「賞賛」や「感激」を包括して「共感的喜び」とよび、その内容を検討している。しかし、この研究は大学生を対象にしており、ここで用いられている共感的喜びということばが児童・生徒には難解だと考えた。そこで本研究では、Smith(2000)上方同化的感情を学校教育現場で、児童・生徒にわかる言葉で表現したものが「あこがれ」だと考えた。なぜなら、あこがれとは、特定の人物や状況と比較して、現在の現状から脱して理想の状態になりたいという強い思いのことだからである。

他方で、大野(1997)は、あこがれは特定の人物や状況への情緒的・一時的な一体化に過ぎないようだと指摘している。つまり、あこがれは一過性のもので、自分自身を向上させようとする継続的、持続的なエネルギーとはなりにくい。このことから、学校教育現場であこがれを、自分自身を向上させる意志にするには、あこがれを抱かせることだけを焦点にするのではなく、それが向上しようとする継続的、持続的なエネルギーに転換することが重要になると考えた。そこで本研究は、人を向上させようとする継続的、持続的エネルギーを「向上心」と考え、内発的な意欲、やる気、負けん気を取り上げた。

ところで、ある自分とは違った特定の人物や状況がもたらす感情には、あこがれの他に、もう一種類の感情がある。それはSmith(2000)の「上方対比情動」である妬みである。あこがれと妬みは、自分より優れたものを持つ人に対する情動である点は一致している。しかし、あこがれは他者に意欲と希望を与え、自分を高める意欲に結びつく。しかし、妬みには、自分を向上させようとするエネルギーには繋がりにくい。妬み感情の構造や発達の变化については、澤田の一連の研究で明らかにされている(澤田, 2002, 2003, 2005)。しかしあこがれと妬みの違いはどこで生まれるのかについての研究は、山本(2009)の他はほとんど見られない。そして、教育現場にあこがれを導入しようとするなら、教師の側は、両者の違いをしっかりと認識しておく必要があるだろう。そこで本研究は、向上心と似ているが、自分を成長させようとするエネルギーには繋がりにくい妬みをも取り上げ、向上心との比較を通して、向上心の様相を明らかにしたいと考えた。

以上のことより、本研究の目的はあこがれが学ぶ意欲に及ぼす影響について、向上心(意欲、やる気、負けん気、と比較のための妬み)、目標志向性(マスタリー目標、パフォーマンス目標)の関係から検討すること

である。

方法

1. 調査対象

公立小学5年生 69名(男子36名 女子33名)

公立小学6年生 65名(男子35名 女子30名)

公立中学1年生 63名(男子32名 女子31名)

2. 調査方法

2008年10月～11月に、無記名選択式のアンケートで実施した。

3. 質問紙の構成

(1)速水・伊藤・吉崎(1989)の達成目標傾向尺度を参考に作成した目標志向性を測る尺度20項目。

(2)築田(2006)のやる気を測る尺度6項目と、負けん気を測る尺度6項目。

(3)國吉(2007)の向上心を測る尺度を参考に作成した意欲を測る尺度9項目。

(4)澤田・新井(2002)の児童・生徒用妬み傾向尺度から妬みを測る尺度8項目。

(5)著者が作成したあこがれを測る尺度4項目。

以上53項目で構成した。

これらについて「ぜんぜんあてはまらない(1点)」「あまりあてはまらない(2点)」「だいたいあてはまる(3点)」「ぴったりあてはまる(4点)」の4段階評定とした。

結果と考察

1. 因子分析

あこがれ、意欲、やる気、負けん気、妬み、マスタリー目標、パフォーマンス目標のそれぞれを1因子構造で仮定していたため、1因子固定による因子分析(主因子法・プロマックス回転)をそれぞれ行った。各項目の因子負荷量と信頼性係数(クロンバック α)をTable 1に示す。

2. 得点の性差および発達差

各尺度得点について性別(2)×学年(3)の2要因分散分析を行った。下位尺度合計得点の平均値と標準偏差をTable 2に示す。分散分析の結果、あこがれには学年の主効果($F(2/172)=4.76 p<.01$)が認められ、多重比較の結果、小学5年生の方が小学6年生よりあこがれが有意に高かった。つまり、年齢が低い方があこがれを抱きやすいことがわかった。また、妬みについては性別の主効果($F(1/172)=12.26 p<.001$)がみられ、下位検定の結果、小学5年生($F(1/172)=10.11 p<.01$)と中学1年生($F(1/172)=8.30 p<.01$)で差が見られ、いずれも女子の方が高かった。このことから、女子の

Table 1 各項目の因子負荷量と信頼性係数

	意欲 ($\alpha = .86$)	
	・いろいろなことに挑戦してみたい。	0.78
	・自分ができることを見つけていきたい。	0.78
	・もっといろいろなものを見て学んでいきたい。	0.74
	・自分の将来のことをちゃんと考えたい。	0.67
	・新しいことをもっと知りた。	0.66
	・立派な人間になりたい。	0.63
	・自分がやりたいことを探したい。	0.55
	・自分でできることの数を増やしていきたい。	0.55
	・今やっていることは将来役に立つと思う。	0.47
	やる気 ($\alpha = .81$)	
	・難しいことでも自分の力を精一杯出して頑張ってみようと思う。	0.78
	・やろうとしたことは何でも一生懸命やりたい。	0.76
	・うまくいかどうかは気にしないで一生懸命頑張りたい。	0.69
	・これだけは頑張りたいという目標を持っている。	0.63
	・人に勝つことより自分ができるだけ頑張るやることが大事だ。	0.58
	・みんなに喜んでもらえることをしたい。	0.49
	負けん気 ($\alpha = .80$)	
	・スポーツや勉強は他の人よりうまくやりたい。	0.77
	・勉強やスポーツで一番になりたい。	0.69
	・競争相手に負けるのは悔しい。	0.66
	・他の人と競争して勝つとうれしい。	0.65
	・わたしはどうしても人に勝ちたい。	0.64
	・勉強やスポーツで頑張るのは人に負けないためだ。	0.44
	妬み ($\alpha = .80$)	
	・何をしても他の人をうらやましく思い、悩んでしまう。	0.72
	・他の人をうらやましいと感じると、つらくなる。	0.71
	・正直言って、友達がうまくいくと腹が立つ。	0.64
	・他の人のことをうらやましいと感じることがよくある。	0.59
	・なんでも上手にすぐできる人を見るのは不満だ。	0.56
	・自分に何か足りない感じると、困ってしまう。	0.52
	・何でもできる人がいることは、少し不公平だと思う。	0.44
	・他の人より自分ができないと感じるのは、つらいけど本当のことだ。	0.41
	あこがれ ($\alpha = .62$)	
	・プロや習い事の先生の中にすごいと思う人やあこがれる人がいる。	0.65
	・同じ習い事をしている人の中にすごいと思う人やあこがれる人がいる。	0.63
	・家族や親戚の中にすごいと思う人やあこがれる人がいる。	0.48
	・学校のクラスの中にすごいと思う人やあこがれる人がいる。	0.41
	マスタリー目標 ($\alpha = .90$)	
	・新しいやり方を見つけるのがおもしろいから。	0.81
	・できるようになるのがおもしろいから。	0.78
	・難しいことに挑戦するのが楽しいから。	0.76
	・新しいことを知ること、見つけることができるから。	0.73
	・わかるのが楽しいから。	0.72
	・難しいことやできなかったことができるようになると感動するから。	0.65
	・問題を解いたり練習したりするのがおもしろいから。	0.64
	・頭を使うことや体を動かすのが好きだから。	0.64
	・つまずきや失敗を乗り越えるのが楽しいから。	0.62
	パフォーマンス目標 ($\alpha = .86$)	
	・両親や先生に認められたいから。	0.72
	・成績を良くしたいから。	0.68
	・両親や先生にほめられたいから。	0.66
	・よい成績をとると自慢できるから。	0.65
	・ライバルに勝ったとき気持ちいいから。	0.59
	・両親や先生にしかられたくないから。	0.59
	・友達にバカにされたくないから。	0.59
	・失敗して恥ずかしい思いをしたくないから。	0.58
	・友達に注目されたいから。	0.55
	・テストや試合、発表会などでいい成績を残したいから。	0.53

向上心

あこがれ

目標志向性

Table 2 下位尺度合計得点の平均と標準偏差

		意欲	やる気	負けん気	妬み	あこがれ	マスタリー	パフォーマンス
男	小5	31.03 (5.42)	20.79 (3.10)	18.59 (3.84)	17.50 (4.38)	13.26 (2.55)	29.76 (6.23)	28.71 (7.58)
	小6	32.00 (3.95)	20.97 (3.11)	18.35 (4.17)	19.39 (3.85)	12.32 (2.70)	29.97 (6.02)	28.71 (8.37)
	中1	29.52 (7.25)	18.65 (5.48)	17.26 (5.99)	17.00 (5.61)	11.56 (3.10)	25.83 (8.37)	26.70 (7.80)
	全体	30.98 (5.55)	20.30 (3.95)	18.16 (4.58)	18.03 (4.63)	12.49 (2.81)	28.81 (6.94)	28.18 (7.88)
女	小5	32.03 (3.97)	20.23 (3.34)	17.58 (3.65)	21.32 (6.31)	13.84 (2.24)	28.45 (5.95)	27.94 (8.68)
	小6	32.10 (3.36)	20.34 (2.11)	18.28 (2.60)	19.38 (4.67)	11.83 (3.02)	27.55 (4.36)	29.97 (5.40)
	中1	31.63 (3.32)	20.60 (2.57)	17.70 (2.98)	20.87 (3.97)	13.27 (3.20)	27.27 (5.44)	27.13 (6.80)
	全体	31.92 (3.54)	20.39 (2.71)	17.84 (3.10)	20.64 (5.11)	13.00 (2.94)	27.77 (5.27)	28.32 (7.15)
全体	小5	31.51 (4.77)	20.52 (3.21)	18.11 (3.75)	19.32 (5.68)	13.54 (2.40)	29.14 (6.09)	28.34 (8.07)
	小6	32.05 (3.65)	20.67 (2.67)	18.32 (3.47)	19.38 (4.23)	12.08 (2.85)	28.80 (5.38)	29.32 (7.06)
	中1	30.72 (5.43)	19.75 (4.16)	17.51 (4.49)	19.19 (5.08)	12.53 (3.24)	26.64 (6.83)	26.94 (7.18)
	全体	31.46 (4.65)	20.34 (3.37)	18.00 (3.89)	19.30 (5.02)	12.75 (2.88)	28.28 (6.16)	28.25 (7.50)
	MAX	36.00	24.00	24.00	32.00	16.00	36.00	44.00

方が妬みを生じやすいことが窺えた。しかし、本研究で重要視するあこがれで性別の主効果がみられなかった。このため、以後は男女込みで分析することにした。

3. 向上心、目標志向性へのあこがれの影響

あこがれが向上心、目標志向性に及ぼす影響をみるため、あこがれを独立変数、向上心各因子(4)と目標志向性各因子(2)を従属変数とした単回帰分析6回と、向上心各因子を独立変数、目標志向性各因子(2)を従属変数とした重回帰分析2回を行った。その際、まずあこがれ合計得点の平均値を算出した(12.75点)。よってあこがれ合計得点が12点以下の人を「あこがれ低群」、13点以上の人を「あこがれ高群」とした。

(1) あこがれの高さによる違い

あこがれ高群、低群の両方に見られた共通点は、あこがれ→意欲・やる気→マスタリー目標の正のパス、あこがれには繋がっていないが、負けん気→パフォーマンス目標の正のパスであった。このことから、あこがれは、内発的な意欲・やる気を介して、内発的な動機付けを高めるマスタリー目標に繋がること、負けん気はあこがれには繋がっておらず、他者との比較を増幅させ、時には動機付けに否定的に作用するとされるパフォーマンス目標に繋がることがわかる。

高群と低群の違いは次の所に見られる。まず、高群のパスは低群にすべて含まれており、高群にのみ見られるパスはない。そして、次の部分に低群にのみ見られるパスが見られる。

それは、①あこがれは向上心を介せず直接、目標志向性につながることで、②あこがれには繋がっていないものの、負けん気が内発的な動機付けを高めるマスタリー目標に繋がっていること、③妬みが他者との比較を増幅させ、時には動機付けに否定的に作用するバ

フォーマンス目標に繋がっていることである。

まず、①のあこがれから目標志向性への直結パスは、あこがれが低い場合は、持続的・継続的な向上心には結びつきにくいことを示している。持続的・継続的な向上心には、強いあこがれが関わっている可能性を示している。

②の負けん気がマスタリー目標に繋がることについては、渡辺・土井(2007)が参考になる。渡辺・土井(2007)は、負けん気には「競争心」と「頑張り」という内外的な二側面をもつと指摘している。児童・生徒の「友だちに負けたくない」という負けん気は外発的動機づけとなるが、「目標達成のために自分に負けたくない」という負けん気は内発的な動機づけとなる。そしてあこがれが低い状態とは、あこがれの人物を目指して、それに近づきたいという気持ちに代わり、周囲に負けまいと頑張りが大きくなり、それが自分に負けまいとするマスタリー目標にむつび付くと考えられる。

③の妬みに関する結果は、妬みは自分と類似した他者がその対象となりやすいという山本(2009)の結果と一致している。自分と類似性が高いと、あこがれは小さくなるに違いない。そして本研究の結果、あこがれの小さいときに、妬みがパフォーマンス目標に結びついている。このことから、教育現場で上方同化的感情である「あこがれ」を用いる場合は、ある程度、児童・生徒と差のある対象を扱う方がよいと予測できる。

他方で、妬みは、優れた相手への攻撃と言ったネガティブな行動をもたらすだけでなく、ポジティブな効果もあるとする立場もある。これに関して、Smith & Whitfield(1983)は、妬みを感じていることを本人が認めれば、妬みは自分が何を欲しているのかを知る情報源となり、それが人の発達に重要な役割を果たすという。

以上のことから、学校教育現場であこがれを用いる

場合、負けん気の強さは内発的な動機付けに向かうように、妬みが生じた場合には、それを児童・生徒自身が自分を知る機会ととらえて向上心につなげ、それらを継続的・持続的エネルギー変換させるように支援してゆけば、あこがれが生み出すネガティブな側面も、児童・生徒の成長・発達に繋がるものとしてゆけると考えられる。

(2) 学年による違い

次に学年別の違いを検討した。まず、どの学年でも、共通してみられたのは、①あこがれからマスターリー・パフォーマンスの両志向性への直結パス、②あこがれから、向上心の意欲・やる気へのパスのみだった。それぞれの学年別のパス図の中で3つに共通してみら

れるパスの数が少ないことから、あこがれの目標指向性への関係には、発達の差があることが窺える。以下に、その違いを考察する。

まず高群、低群に分けた際に共通してみられた、あこがれ→意欲・やる気→マスターリー目標のパスは、小学校5年生には見られたが、他の学年では見られなかった。このパスについて詳しく見てみると、6年生ではあこがれから、やる気を介してマスターリー目標に繋がるパスが見られたが、中学1年生では、あこがれ→負けん気→マスターリー目標・パフォーマンス目標という「負けん気」を仲介するつながりしか得られなかった。さらに中学生に見られたこのパスは、負けん気から2種類の目標指向性に繋がるパスであり、中学生ではマスターリー目標よりもパフォーマンス目標の方

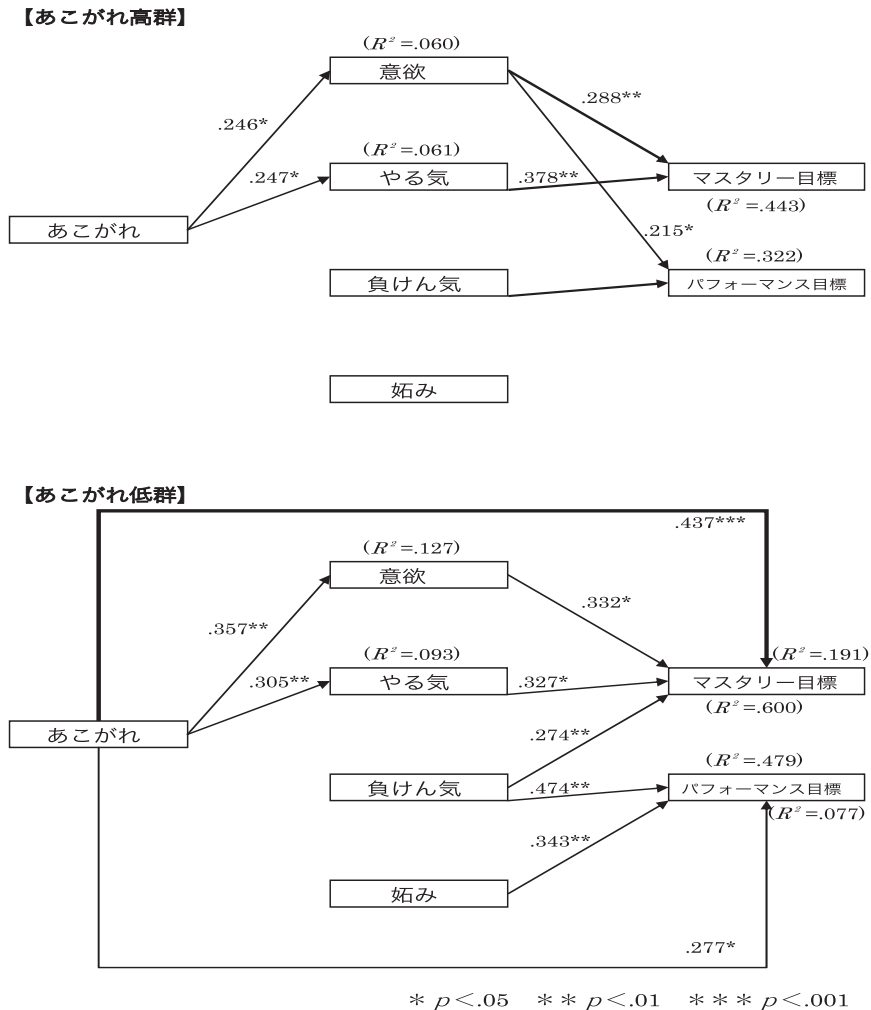


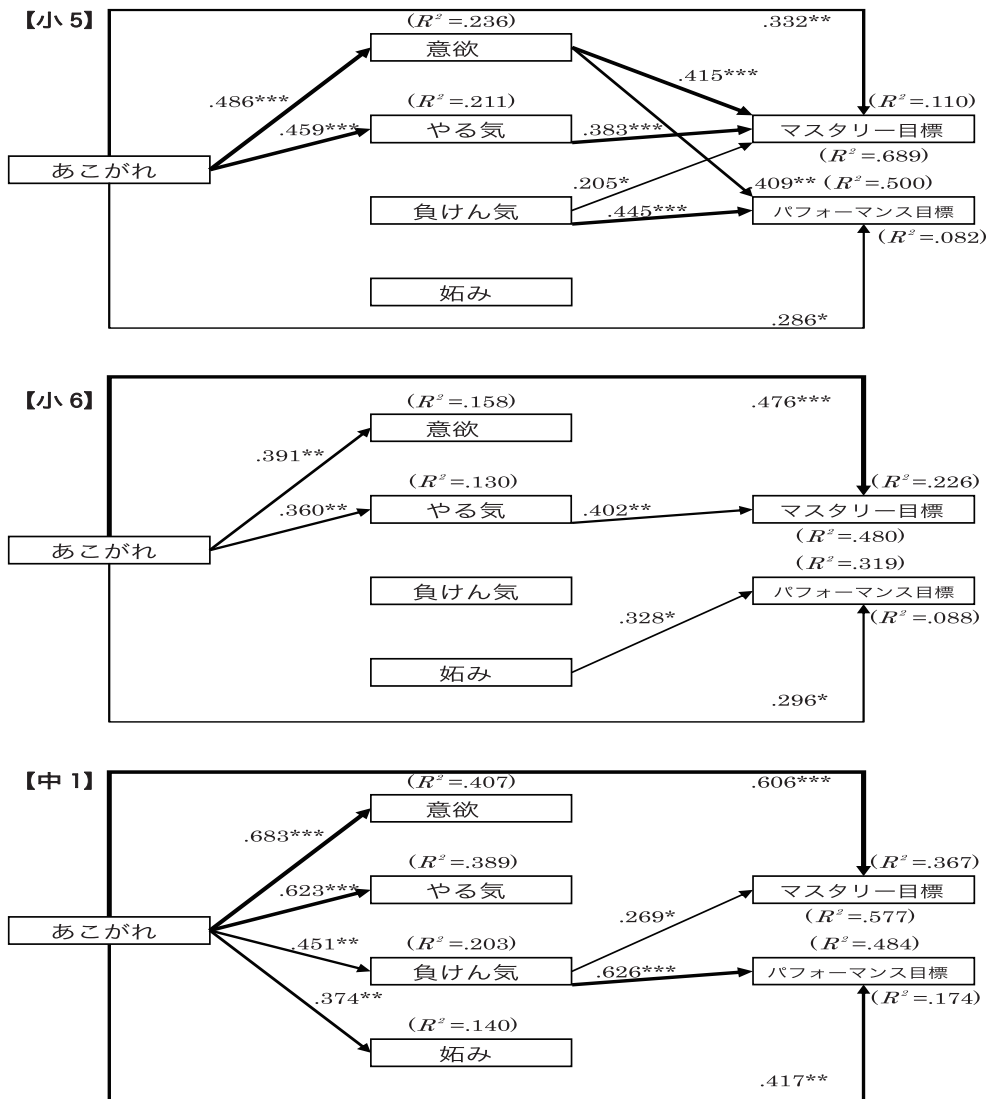
Figure 1 あこがれの高低と向上心、目標指向性の関係

が2倍以上強いパスとなっている。このことから、目標指向性に及ぼす向上心は学年によって変化し、5年生では、意欲とやる気、6年生はやる気、中学生では負けん気がかなり強い影響を示していることがわかる。

他方で、中学校1年生の結果を見てみると、3つの学年で共通してみられた、あこがれから意欲・やる気へのパスが一番強くなっている。加えて、他の学年には見られない、あこがれから負けん気や妬みへのパス

も見られる。このことから、中学生であこがれの影響力は下がったわけではないことがわかる。つまり、中学生では、あこがれの影響も強いけれど、競争に負けまいとする気持ちが、学習への持続的・継続的エネルギーとなって、パフォーマンス目標に繋がっていることが予測できる。

考えてみると、中学生になると、小学校に比較して、成績や部活動などで多くの競争的な場面にさらされる。そのような環境の中で、生徒達に競争的な意識が



* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Figure 2 あこがれの目標指向性への影響に関する発達差

芽生え、徐々にその意識が強くなってゆくのかもしれない。そして激しくなった競争の中では、勝つための学習として、パフォーマンス目標が重視されるようになることが要因の一つだと考えられる。妬みのパスが見られるのも、競争意識の強さの表れかもしれない。

ところで、5年生に見られ、6年生、中学生に見られないパスは、意欲から目標指向性へのパスである。意欲の項目を見てみると「いろいろなことに挑戦してみたい」「自分がやりたいことを探したい」「自分の将来のことをちゃんと考えたい」といった希望的な項目である。これに対して、やる気は「難しいことでも自分の力を精一杯出して頑張ってみようと思う」「うまくいったかどうかは気にしないで、一生懸命頑張りたい」「これだけは頑張りたいという目標を持っている」等、目標への決意を表現するような内容となっている。つまり、6年生になると、希望的な向上心は目標指向性への影響が少なくなることがわかる。そして6年生以降は、自己の決意表明的な内容が、目標指向性に結びつく向上心となることが窺える。

小学校5年生と言えば、第二次性徴前であり、運動面でも学習面でも大人に比してできないことも多い。中学生くらいになると、だんだんいろいろなことができるようになり、体の大きさも大人との差が小さくなって、大人と身体的、能力的な差が小さくなっていく。加えて形式的操作期に入り、自分や周囲を客観的に考えられるようになった結果、等身大の自分の姿が徐々に見え始める。こうなってくると、単なる漠然としたあこがれは抱きにくくなっていくのかもしれない。そしてその代わりに重要になってくるのが、同じく大人との距離が小さくなった仲間なのかもしれない。その結果、つい仲間と比較して、その中では、「友だちに負けたくない」という気持ちが強くなっていくのかもしれない。学校教育現場の教師は、小学生から中学生なる過程に見られるこの負けん気の強さの変化を理解しておく必要があるのではなかろうか。

あこがれは内的エネルギーに転換される必要があると大野(1997)は述べている。本研究でもあこがれは、意欲ややる気、負けん気といった自分自身を向上させようとする継続的・持続的エネルギー(向上心)を介してマスタリー目標に影響を及ぼすこと、その影響過程には発達差があることが示された。しかし本研究で用いたあこがれを測る尺度は、著者達が考えた項目であり、全体で4項目であった。このため、あこがれを測定する尺度として必ずしも信頼性が高いとはいえない。参加者の数も学年別に見た際には十分とはい

えない。今後これらの弱点が克服された研究が積み重ねられることを期待したい。

引用文献

- Ames, C. 1992 Classroom: Goals, structures, and students motivation. *Journal of Educational Psychology*, **84**, 261-271.
- Dweck, C. S. 1986 Motivational process affecting learning. *American Psychologist*, **41**, 1040-1048.
- 速水敏彦・伊藤 篤・吉崎一人 1989 達成目標傾向尺度 堀 洋道(監修) 心理測定尺度集IV サイエンス社 Pp. 135-139.
- 荻谷剛彦 2001 階層化日本と教育危機—不平等再生産から意欲格差社会へ 有信堂
- 國吉和子 2007 大学生の学習動機に関する研究 沖縄大学法経学部紀要, **8**, 39-48.
- 中谷素之 2001 社会的動機づけの発達と学業達成過程 名古屋大学教育学部紀要, **48**, 217-232.
- 大野精一 1997 夢・あこがれ・希望の大切さ 児童心理 **51**(2), 70-75.
- 澤田匡人 2003 児童・生徒における妬み感情歓喜場面の諸場面 発達臨床心理学研究, **15**, 57-64.
- 澤田匡人 2005 児童・生徒における妬み環状の構造と発達の变化; 領域との関連及び学年差・性差の検討 教育心理学研究, **53**, 185-195.
- 澤田匡人 2008 妬みから憧れへ—前向きな競争心の育て方 児童心理 **62**(8), 754-759.
- 澤田匡人・新井邦二郎 2002 妬みの対処方略選択に及ぼす妬み傾向、領域重要度、および獲得可能性の影響 教育心理学研究 **50**, 246-256.
- Smith, R. H. 2000 Assimilative and contrastive emotional reactions to upward and downward social comparison. In J. Suls & Wheeler (Eds.), "*Handbook of social comparison: Theory and research*" New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers. Pp. 173-200.
- Smith, V., & Whitfield, M. 1983 The constructive use of envy. *Canadian Journal of Psychiatry*, **28**, 14-17.
- 築田祥子 2006 子どもの self-regulation, 達成動機と生活充実感との関連 岡山大学卒業論文
- 渡辺弘純・土井直子 2007 小学校児童における負けず嫌いの積極的意味を探索する 心理学, **28**, 96-109.
- 山本良子 2009 共感的喜びと妬みの発生に関与する状況要因 東京大学大学院教育学研究科紀要 **49**, 327-345.